

台湾茶の歴史を訪ねる 第二回



(2) 輸出された台湾紅茶

須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

前号では埔里にある紅茶工場を紹介し、その中で台湾紅茶の歴史を当時の日本の取り組みと合わせながら、簡単に見てきた。今回もまた別の地域の紅茶の歴史を取り上げる。やはりお茶は国際的な戦略物資であり、その時々情勢に大きく左右される歴史的な産物であった。同時に外国商人による烏龍茶、華僑ネットワークによる包種茶の後、台湾茶における日本の主導的地位は、この紅茶生産によって確立されたと言えるが、その期間は極めて短かった。

台湾の紅茶はいつから

台湾が正確に何時から紅茶を作り始めたのかはよくわからない。19世紀後半、1860年代に外国商人が台湾に入ってきた過程で、輸出用として紅茶を欲しがったという事実はあり得るが、紅茶が実際に作られていたという証拠は見つからなかった。また台湾の烏龍茶を紅茶と称して輸出した、という話も聞いたが、果たしてどうだろうか。

本格的なスタートは、日本による台湾統治が始まった翌年、1896年に出された茶業試験場設置意向書を見ると、烏龍茶と並んで『志那風紅茶』『印度風紅茶』を試験するようになっており、1903年に安平茶業試験場が開設されると、実際に試験が始まっており、ここから台湾紅茶が始まったと言えそうだ。

1906年にはこの安平茶業試験場の初代所長をしていた藤江勝太郎が漢口風紅茶(紅磚茶)を製造し、ロシアに輸出して好評を博したとの記録が残っていた。静岡出身の藤江は、静岡屈指の茶業者だった父の影響もあり、横浜で緑茶と紅茶の製法を学んだと言われている。同時に早くから台湾烏龍茶にも着目し、1886年には自ら台湾に渡り、烏龍茶の製法を取得したらしい。1895年には出来たばかりの総督府殖産課に技手として赴任、台湾での活動を開始し、日本時代における茶業の基礎を作った人となった。

試験所のいうところの『志那風紅茶』とは、当時中国湖北省からモンゴル経由でシベリア、そしてモスクワ、サンクトペテルブルクまで運ばれていった、紅茶の粉末を固めて作られたブロック型の紅磚茶を指していたようだ。因みにこの輸出ルートは最近中国で話題となっている『万里茶路』と呼ばれる、茶のシルクロードである。台湾で初めて輸出された紅茶がもし紅磚茶であったとすれば、それは相当意外な話ではないか。尚総督府は当初から、茶の輸出先としてロシアを念頭に入れていたようで、何度か台湾茶の市場開拓を民間人に委託したという記録がある。



茶業改良場に残る古い揉捻機

1910年には横浜の砂糖王、安部幸兵衛等の実業家により日本台湾茶業株式会社が設立され、旧来の試験場の製茶施設を借り受け(紅茶製造を委託)、苗栗の茶園を買い取り、初の紅茶専門製造が開始された。ここで作られた紅磚茶は評判もよく、一時は順調に輸出を伸ばしたが、ロシアの革命、そしてインドやスリランカによる大型機械による大量生産による安価な紅茶が出回ると太刀打ちできなくなり、1920年代には、輸出はほぼ停止状態にまで陥ったという。藤江も当初この会社の取締役兼技師長を務め

たが、帰国後は郷里森町の町長になった。

全くの余談ではあるが、実はここに一人の人物を発見した。名前は可徳乾三。この名は九州で日本の国産紅茶を商っている方から以前に質問を受けたことがある。『日本紅茶の祖は静岡丸子の多田元吉と言われているが、同時期に九州熊本で紅茶作りをした男がいたのでその足跡を知りたい』と言われたが、なかなか資料が見付からなかった。

今回の調査で、可徳が日本台湾茶の長老社員として働き、その独自の製法が評価されていたことが分かった。後に魚池で紅茶生産を始める、三庄製茶の取締役、渡辺伝右衛門も若き頃、この会社で働いていたが、可徳のことを回想する文章を残していた。その中には『可徳は紅茶研究の第一人者であり、彼の作った紅茶は海外の市場価格より高く取引された』と書かれている。

1887年には政府の派遣で湖北省漢口に赴き、中国式の紅茶作りを学び、その後ウラジオストックでロシア・蒙古相手に茶の取引をした(日露戦争の影響もありその後破産して台湾に渡った)可徳なら、ロシア向けの紅茶をどのように作ればよいかはよくわかっていただろう。もしやすると、彼がいたから、『漢口式紅茶』が順調に製造・輸出されていたのかとも思ってしまう。いや、元々前述の藤江と可徳は日本か、中国かで知り合っており、製造技術から市場までを語り合っていたのではないかと、と勝手な想像を巡らしてしまうのだが、それは夢の中の話だろうか。

日東紅茶を作り出した大溪老茶廠

桃園県というのは本当に広い。桃園空港から台鉄桃園駅へ行くバスに夕方乗ると約1時間もかかってしまった。そんなに遠いと思っていないから慌ててしまう。そして桃園駅前ユニークというのが適切で、漢字ではない言語の看板が溢れているのだ。タイ、インドネシア、ベトナムなどの料理を出す食堂が立ち並ぶ。それだけ台湾には東南アジアからの出稼ぎ者が多いということだろうが、ここに食べに来

るのは、台湾人なのか、それとも各国人なのか。



観光地となった大溪老茶廠

その桃園駅前のバスターミナルからバスに乗って1時間余り。大溪というところに、三井が建てた老茶廠があると言われて訪ねてみた。1926年に旧名角板山工場として建造され、日東紅茶を大量生産していた場所である。光復後の1956年に大火に見舞われ、59年に再建されたものの、既に最盛期は過ぎており、最終的に95年に生産が完全停止された。

その後は使われることなく放置されていたが、近年観光用にきれいに整備され、週末は家族連れでにぎわっている。1階の一部には昔の製茶機械と共にその歴史が展示されており、2階部分は昔のまま、高い天井に萎凋が出来そうな広々としたスペースがあり、窓枠や手すりなどにその歴史を感じることができる。これぞ、『印度風紅茶』の製造現場である。



1926年当時の角板山工場の写真

三井合名は日本による統治が始まってすぐに台湾

にやって来て、産業調査を開始した。1908年に台湾支所を設立、1920年代には、それまでの磚茶ではなく、インドなどにみられるイギリス方式の、機械化、大量生産によるコスト低下が求められ、1924年に大寮、そして1926年にここ大溪、その後苗栗に三又の茶工場を作り、日東紅茶の名で生産量を高めていき、『ダージリンにも似た香りや味』とロンドンで評判を取ったとある。茶業試験場が紅茶に適したインドのアッサム種を導入したのもちょうどこの頃である。

尚日東とはリプトンの中国語『立頓』と発音が似ているところから付けられた名前との説もあるがどうだろうか。台湾の紅茶は三井が大規模な機械化を進め、優れた品質の茶を作り出し、本格的にスタートしたと言ってよいだろう。

順調だった三井の日東紅茶だが、1937年には三井合名の農林課を発展的に分離独立させ、日東拓殖農林株式会社を設立し、三井合名の茶業、林業などの全ての事業を引き継いでいる。1939年に台湾の新聞に載せられた広告を見ると、『純国産』が謳われ、製造元は日東拓殖、発売元は三井物産、台湾島内の販売は辻利茶舗、と書かれている。光復後、台湾の資産は全て台湾農林に接収され、日東紅茶というブランドだけが日本本土に移されていく。

昭和初期、日本でも中流以上の家庭では紅茶が飲まれていたと聞く。当初はリプトンなど外国からの輸入品であったが、不景気もあり国産品への切り替えが奨励され、静岡や鹿児島で紅茶が作られていたが、(国産紅茶として)この日東紅茶の出現で、一気に拍車がかかったのではないかと思われる。因みにコーヒーはブラジルからの輸入に規制がかかるなど、紅茶が発展する要因はいくつかあったようだ。現在では日東紅茶が台湾発祥であることを知らずに飲んでいる日本人が多いのはなんとなく残念でならない。

台湾資本の台湾紅茶株式会社

台湾には、日本と同じ地名がいくつもある。三重、

板橋、岡山など、どうして付いたんだろうかこの地名、と思うことが多々ある。新竹県には関西という地名もあった。関西鎮、元は『咸菜礮』と呼ばれていたが、日本統治時代に、客家語の発音が似ていたことなどから、関西に改名されたと、珍しい客家料理をつまみながら話してくれたのは、羅吉平さん。桃園県、新竹県、苗栗県あたりは客家の人々が多く住む地域であり、茶業に関わった人も少なくない。



台湾紅茶の展示館で 羅慶士氏、羅吉平氏と

羅さんも客家の一族の出身であり、日本統治時代、関西付近有数の茶工場であった台湾紅茶株式会社(以後台紅)の第4代継承者である。現在の台紅は関西の街中に、『台湾茶業文化館』として、レンガ造りの工場はそのままの姿を留めている。3代目(台湾の『代』とはその一族における世代を表している)で現在ここの館長をしている羅慶士氏に話を聞いた。昭和12年生まれで、流ちょうな日本語で案内をしてくれる。

台紅は1937年に設立された、台湾資本で最大の紅茶工場だったが、それ以前からこの周辺には沢山の茶工場が存在し、羅一族もいくつもの工場を所有していた。これを統合して設立したわけだが、その理由はやはり総督府による紅茶事業奨励と関連があるらしい。前回の東邦紅茶でも見てきたが、当時台湾資本で日本と無関係に独立して事業を進めていくことには様々な困難が伴ったと思われるが、その中で台紅も奮闘していたようだ。『当社はこれまでの歴史で世界の86の港に茶葉を輸出している』と誇ら

し気に、港の名前が刻まれたプレート指さす。国策事業、外貨獲得である。

前述の三井の日東紅茶は世界各地に輸出されていたが、同じ財閥の三菱は、台紅に目を付け、1938年には羅氏の父親と三菱台北の社員と一緒に、旧満州からモンゴル、ソ連へ出張して、茶葉輸出の可能性を探っていたと話してくれた。当時満州には台湾の包種茶が大量に輸出されており、市場があるとすればソ連で、ハルピン経由で紅茶が輸出された様だ。しかし第二次世界大戦となり、茶の輸出は頓挫してしまった。更に羅家は三菱本社の株も保有していたというが、戦後は株券が紙切れになってしまった、と残念そうに話してくれた。

因みに紅茶製造の技術はどこで学んだのかと聞くと、『近くに三井の工場もあり、そこに働きに行っただけ』とか、『試験場に勉強に行った』など、やはり日本に学んだことは窺える。またその当時、紅茶生産に使われた品種として黄柑種というのがある。現在では産量が上がらないため、殆ど見られなくなっているが、この品種は広東省あたりから客家が持ち込んだのではないとも言われている。ただ当初は烏龍茶や包種茶作りに使われたが、あまり適していないという評価があり、紅茶作りに利用したところ成果があったらしい。当時の総督府の検討委員会における黄柑種活用に関する議事録を読んでみたが、実に幅広い議論がなされており、総督府の茶業への思いが感じられた。

1945年に戦争が終了し、茶葉の国際的な需要が戻ってきていた。台紅もいち早く生産を再開し、ヨーロッパなどへの輸出を行って行くのだが、ここで大きな問題が持ち上がる。『台湾はどこの国に属しているのか?』、輸出先ではどこの国から茶葉が輸入されるのかを確認するのだが、1945-49年の台湾には帰属するところがなかった。

台湾を独立した国として『Taiwan』と書いて送っても、受け入れてもらえなかった。しかし中国大陸では共産党と国民党が内戦しており、この問題を解決できる人はいなかったのだ、どうしたものかと頭

をひねったらしい。結局政治や外交ではなく、あくまで商人の観点から『MADE IN CHINA』と書いて、輸出していたという。1950年以降は『REPUBLIC OF CHINA』となっているので、その歴史的な意味をプレートから読み取ることができる。尚日本時代は『MADE IN FORMOSA』と書かれたプレートも見受けられ、台湾茶と日本茶は国際社会では区別されていたようだ。



台湾紅茶の展示館に残る輸出用プレート

1950年代は台湾茶、特に紅茶の黄金期だった。長年の苦勞が報われた時期ではあったが、茶は国際的な市況品、必ずしも良い時期ばかりは続かない。50年代の終わりには、既に紅茶の輸出に陰りが見られていたが、その時は、長年取引のあったオランダの会社が3年に渡って大量の注文を入れてくれ、危機を凌いだともいう。台紅は本当に国際的な企業だったのだな、と思うエピソードである。だがそれも長くは続かない。

いずれにしても1960年代はすでに、為替高、コスト高で輸出競争力が無くなっていた台湾の紅茶産業は、70年代以降、長いトンネルに入ることになる。台湾国内では、輸出から内需へ、台湾人が飲むお茶の生産が叫ばれたが、残念ながら紅茶を飲む台湾人は殆どいなかったのだ。その紅茶が復活を遂げるのは2000年代に入ってからで、1999年の921大地震にまつわる話になる。その後、台紅はどのように事業を継続して現在に至ったのだろうか。それは次回以降のテーマとする。